

を知解するのに役立ち、信仰は知解したことを更に信じるのに奉仕する。信仰と知解が共に働くとき、人間は内的に成長する (Enarr. in Ps., 118, 18, 3)。

3.9 神を credere することは神を videre することにつながり、また、神を intellegere することも、神を videre することにつながる (Tr. in Joh., 40, 9: De tr., XV, 27, 49)。

提題 アウグスティヌスに於ける信仰の知解について

宮内 璋

アウグスティヌスが信と知について語る時、「信ずるとは、^{うべ}諾いを以て思惟することである (cum assensione cogitare)」(praed. sanct. II, 5) という基本的把握が、常に根底をなしている。即ち、信は、知と対比されてはいるが、知の展開という魂の基本的動向 (cogitatio) の一相として提示され、思惟が、信ずるというその特殊性に先立つより普遍的なはたらきとして先ず立てられ、そのはたらきの暫定的結実として信は位置付けられている。従って信は、知本来の相たる「達成」としてあるのではない。諾いという意志の (≡) 動向が頭在化するのはそのためである。そして知も又、信との対比連関という局面において考察されているために、及び得ず、達成されたものとしてはあり得ない域を示しつつ、思惟という動的な言葉によって語られているのである。即ち、この信の規定において限定されている思惟は、記憶にまで沈澱する知 (つてい) (nosse) の現実化として語られる思惟ではなく、それを背景としつつ、既に真に至り、真として現われている知の相、即ち知解 (intelligentia) に向うもの (co-agitatio) として信と言われているのである。信のこの基本的把握は、アウグスティヌスにおいて、知の展開に対応して三つの局面に沿って展開されていると思われる。更に、ここで信を繞る恩寵 (gratia) の問題も姿を現わしているのであるが、我々の持てるものはすべて神に由来するものであることが全体として述べられ、信について特に恩寵が強調されることはない。このことには十分留意する必要があると思われる。

(1)第一は、本来、知覚と結付いた知の把握の内に在るものであり乍ら、時空の条件によって直接的把握が可能でないものについての信が語られる局面である。未だ見たことのないアレキサンドリアの城壁、もはや見ることの出来ない過去の出来事等は、その当の対象 (objectum formale) に関する限り、この局面において信を知らず居る条件の充足、或いは信頼に値する伝聞等の証拠によって、知の把握に入り、信は知へと解消する。これはアウグスティヌスの言う種的・類的な知識の領域である (Trinit. VIII, 5, 7, etc.)。

(2)次に、至福の本質を成すものとして智慧が立てられ、知識と対比される局面である。前者は、神の観想、礼拝として永遠なるものにかかわり、後者は行為を導くものとして時間的なものにかかわる (Trinit. XII, 14, 22 ; 15, 25 ; XIII, 20, 25)。これに対応して、永遠的なものについての信仰と、時間的なものについての信が対比される (XIII, 19, 24)。この局面において、至福であることを願う魂の根源的動向、むしろ、この根源的動向そのものとしての魂の把握 (Trinit. XIII, 4, 7 ; 8, 11) に基付いて、上の知と信の二つの対^つそれぞれの内部に関しても、又、二つの対相互に関しても、交互に滲透する不離のかかわりが示されている (Trinit. XIII, 19, 24)。即ち、二つの対相互、並びにその内部の対比とつながりは、知と信の内的構造と関連とを明らかにするために立てられているのである。

(i)至福の願^いいは万人のものであり、そしてそのことはすべての人が知^らて^いる。しかしそれが全うされるべき永生と永遠なるもの、又それに至るべき道は明らかであるとは言えない (Conf. VII, 21, 27)。知とは、時の地平において、真なるもの (verum) が魂に開かれる真理 (veritas) の位相である。魂はその開かれる場であると言うことも出来よう。従って知は、その進展と共に、真理 (= 全体のあらわれ) がそこには開かれていないことをその進展自身によって示す。この全体の現われが開かれ、その開きにおいて、魂が自己同一として在る位相、それが智慧であり、神の、或いは、永遠なるものの観想 (contemplatio) と言われるのもこのことに他ならない。我々に、今、ここで開かれている知が示す途上 (via)、行路 (cursus) たるこの世の生は、真理の愛と探求であると共に、他面そこに憩い留ることの出来ない悲惨な生である。魂の躍動 (exercitatio animi) と絶望 (non sufficit, desperatio) とが共にここに胚胎し、信仰の道が否定的な形で開かれている (Trinit.

XIII, 1, 1—3 ; 6, 9 ; 7, 10 ; XIV, 19, 26)。

(ii)だが他面、行為を導くこの知は、同時に智慧及び信仰との積極的かかわりをも示している。即ち、我々がそれによってよく生きる諸々の徳の知識は、上述の如く智慧に対比されたものであるが、時間的可死性の内にあるこの生においても、不可変なる則^{るう}(regula)乃至光を通して、神的なるものの智慧に参与しているからである。我々が自分自身^{ただ}義しい人(justus)でないにも拘らず、義しい人をそれとして知り、信じ、且つ愛するのは、我々が他ならぬ自己自身のもので(apud se)認め且つ知解する(cernit et intelligit)義しさの形相と真理に基付いて(ex ea forma et veritate)であり、その形相と真理そのものとは、それ自身以外の何かに基付いて愛されるということは如何にしてもあり得ない(Trinit. VIII, 6, 9)。即ち、我々が誤まることなく判断する時に、或るものを善しとして是認し、或いは或るものを他のものよりもより善いものとして優位に置くのであるが、我々に善そのもの(ipsium bonum)の観念が刻印されているのでなければ、このようなことはあり得ない。例えば、我々の精神は、如何なる物的な光りよりもよりすぐれたものとして優位におかれるが、その根拠は精神それ自身にあるのではなく、それによって創^{つく}られたあの則に(in illa arte)こそあるのである。即ち、精神はそれが創られるべきであったと看做される根拠に拠って、創られてあることが是認されるのである。そしてこの根拠こそ純一にして最高なる善そのものであり(simplex bonum=summum bonum=ipsium bonum=Deus)、そして又我々にとっての善、魂の善(bonum nostrum, bonum animae)でもある(Trinit. VIII, 3, 4—5)。

(iii)もとよりこの善も、義しさの形相も、魂が、それについて判断を下すことによって、それを超えるべきものではなく、愛によって執着すべきものであり(ibid.)、それに拠って魂は判断し、それによって義なる人をも愛するのである。我々が、不変のものであるこの形相を愛することがなければ、それに則^{おつと}て生きたと聖書が伝える使徒パウロを愛することはない(Trinit. VIII, 6, 9 ; 9, 13)。人の子たるキリストについても事情は同じである。想像され、或いは画かれたマリアの形象に拠って、マリアを敬慕するのは全く事情は異なっている。だがしかし「誰が知らないものを愛するであろうか」(VIII, 4, 6), 「何人も、自分が何を愛しているのかを知っていない、と言うべきではない」(VIII, 8, 12), 「愛(dilectio, charitas)とは善を愛

すること (amor boni) 以外の何であろうか」(VIII, 10, 14)。この形相の、そして善の愛の故に、神は、確かに、信仰によって愛される (VIII, 4, 6) のではあるが、その信仰は、全く知られていないものの信仰、全く愛されていないものの信仰として効力を発揮するというのではなく、既に何等か知の視野の内にあるもの、愛されるべきものの信仰として、その信仰によってより明白に知解され、より緊密に愛されるように力を発揮するのである (VIII, 9, 13, fin.)。神は、精神にとってより親く現在し、より内的であり、より確かであるが故に、愛すべき兄弟隣人よりも、よりよく知られているとさえ言われ得る。(VIII, 8, 12)。

以上 (2)の(ii)(iii) のアウグスティヌスの考察は、知が、その判断を可能ならしめている真理の光りの下にあり、それに拠ってはたらくことによって、既に、その限られた位相を超え、神のとさえ言われる (XIV, 12, 15) 智慧を分有し、知の及び得ず信の形に於てのみ保有され得る (と一般に言われる) 域に迄至り、そして更に、その信に或る是認 (approbatio) を与えていることを、又、その根拠を示すものである。

(iv)だが、この知も親しい友人の現に在る性状についての確実にして完全な把握には至り得ない。そこには知はあり得ないというのではなく、十分ではない知とそれに結びついた信頼という形の信があると言うのである。ここで知として把握されるものと、信として保持されるもの (objectum formale sub quo) とは同じではないから、厳密な表現ではないが、知っているものを、「又、信じてもいる (etiam credit)」と言うのである (cf. Soliloq. I, 3, 8 ; Ut. Cred, XI, 25 ; Magist. XI, 37)。そしてこの局面に於ける信は、欺かれ得るが、それが真実である時その事柄そのものの真として現われる (このことはこの生に於てはあり得ないのではあるが) のであるから (in easdem res transit), 知の内に解消する (perit) と言うのは適切ではないとも言われるのである (Trinit. XIII, 1, 3)。この局面に於ける知が完全でないことの故に、即ち信 (頼) への結付きを必要とすることの故に、我々のこの生を正しく生きることを可能にするあの諸々の徳も、永遠なるものへ導く信仰に結付くのでなければ真の徳ではあり得ない、とアウグスティヌスは言う (Trinit. XIII, 20, 26 ; XIV, 1, 3)。それにも拘わらず、信仰の発揮する効力を明らかにし、且つ擁護することがこの知に求められるのは (XIV, 1, 3, init.), 上述の如く、分有とし

てのみ智恵に向って開かれているその限られた位相に於てではあるが、智の照射の下に信仰の吟味をも含めて分節展開する知の、そして知のみが有する自己理解の故である。

(3) アウグスティヌスのこの迂曲に充ちた知解の努力は直ちに第三の局面に接合し、又、そのためになされている。ここに於て、被造を通してかすかに覚られる知の把握をはるかに超える（ここでアウグスティヌスが「超自然的」という言葉——それは問題を消す——を用いていないことは注目すべきことである）神の内実が、権威に拠る信仰として、知解に先立ちそれを可能ならしめるものとして要求される。公同の教会の、聖書の、そしてこれ等の究極の根拠としてのキリストの権威。そしてこの権威に対する信も又、結局はその教えそのものに拠っているのであり、それにとっては外的な理由、即ち、多数の信奉者、内部に於ける見解の一致、永き伝統等に基く一般の高い評価 (Utilit. Cred. XIV, 31—2) に依存しているのではない。この内的権威を歴史に於て証ししようとするアウグスティヌスの知解の努力は、歴史ということそのものの知解として歴史の神学を生み、歴史の哲学に決定的な課題を与えた（他方、西欧の歴史は、この内的な権威が外的な権威と化し、或いはそれと結付く時、自己理解を本質とする人間の本質を無と化する暗黒が世を蔽うことを教えた）。

アウグスティヌスに於て、人が自己の内に確認する至福（それは真理と義に於てのみ在り得る）への切望欣求なくして信仰はあり得ず、このことの解明を措いて信仰の知解はあり得ない。信仰の二つの極、托身と三位一体についても事情は変わらない。ここから発する問いとして、むしろ問いの内に措かれたものとして、問わしめる者に応答しようとするものとして、又、己の内なる悪（^つ則への背逆とそれによる歪み）から脱却しようとするもの（この基本姿勢が浄め purgatio である, Quant. An. IV, 3, 74 ; Doct. Chr. II, 7, 11 ; Trinit. XV, 24, 44）として（この全体が愛 dilectio, charitas である）、信仰は^{うべ}諾いとして成立するのであって、単に受取られるのではない。もとより、教えるものがなければ信仰はない。この故に聖書の解明が信仰とその知解の最も重要な途となり、時間の内に生起した托身と人の子にかかわる信仰が、既にその信仰と解明を含む使徒の事蹟や書簡と共に永遠の秘義への信仰と知解の端緒となる (Trinit. IX, 1, 1)。それ自身時間の内に生起し、時間の内

に生起するものと共に、又それを通して、永遠なるものにかかわる信仰は、不在なるものの現在として、神の像たる精神の三位一体の一環ではあり得ない(XI, 2, 4)。アウグスティヌスにとって、この生に在る限り、この生そのままの途上であり、尚、肉的たるを免れ得ず、直視につながる知解ではない。「プラトン派の書物を学ぶだけでも又得られると思ったかも知れない (Conf. VII, 20, 26 fin.)」とアウグスティヌスが述懐した信仰への道と、諾われた信仰の知解とは相を異にしている。しかし知解としては同じである。それ故に二つの相は重なり合う象面を有する。そして又、第二の局面（上の②）と第三の局面（この③）との夫々に於ける知（解）と信（仰）についても、相互に呼応し合うと共に相重なる面を有する。即ち知はその進展に沿って、智恵への切望が伴う時には信を触発し、信は又、真理への渴仰がある時には知解への動きを必然的に生む。それ故に、この二つの条件を兼ね備えたアウグスティヌスに於て（それは彼にとって人間のあるべき姿であった）信に対しては常に知解が要請され、そして信は常にそのようなものであるが故に、正にそれ故に、知解に先立つ信が強烈に要求されているのである。そしてその核心にキリストが立っている。